

ヨハネ 6:1-6 「主の業、主の心」

聖句

「その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているかを知っておられたのである」

人里離れた小高い丘の上で、主イエスキリストは 5 千人の人々に向かって、福音を語られました。聖書の時代、人数を数えたのは男性だけでありましたから、その場に居合わせていた女性や子どもも加えるならば、全部で 1 万人もの人々が福音を聞いたことになります。

しかし、この人々は、主イエスキリストの福音を聞くために集まった、というよりは、むしろ、病気の癒しの奇跡を求めて、やって来たのでありました。どのような病気も一瞬のうちに癒すことのできる主イエスキリスト。その奇跡に自分も与りたい。また、他の人に行なわれる奇跡をこの目で見てみたい。そのために、集まって来たのでした。

主イエスキリストは、彼らに向かって、福音を語られました。時は過ぎ、日は傾き、人々は空腹をおぼえはじめました。人里離れた場所でありましたゆえ、1 万人もの人々に食事を提供する場所は、何ひとつありません。

主イエスの弟子のフィリポが計算したところによれば、この人たち全員に食事をさせるのに、ひとりあたり 200 円を費やすとして、全部で 200 万円かかる。200 デナリオンとは、それぐらいの金額を示しています。

主イエスは、人々が空腹をおぼえていることを心にとめ、人々の必要に応える

ために、奇跡を行なわれました。ひとりの子どもがたまたま持っていた五つの大麦パンと二匹の魚が、主イエスの奇跡の業によって、1万人もの人々の空腹を満たした上に、食べ切れないで残ったパンが、十二の籠いっぱいになったのです。

人々は、主イエスキリストが、病気を癒すことができるだけでなく、食べ切れないほどのパンを与えることのできるお方であると知りました。

そこで人々は、主イエスを「自分たちの王」として連れて行こうとしました。このお方さえ共にいてくだされば、わたしたちはどんな病気でも癒していただくことができる。このお方さえ共にいてくだされば、わたしたちは好きなだけパンを食べて満腹することができる。このお方を、わたしたちのところにずっと置いておこう。このお方を、わたしたちのものにしよう。このお方を、わたしたちのところに連れて行こう。

しかし、主イエスは、人々から離れて、ひとり山の中にお隠れになったのです。主イエスはわかっておられたのです。人々は、主の心を求めていたわけではない。人々はただ、主の業を求めていたのだ、ということ。

主イエスはわかっておられたのです。人々は、病気の癒しを求めていたのであって、必ずしも主の心を求めていたわけではない。主イエスはわかっておられたのです。人々は、パンを求めていたのであって、必ずしも主の心を求めていたわけではない。主イエスはわかっておられたのです。

しばらくして主イエスは、弟子たちにこう言われました。「はっきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である」(ヨハネ 7:26-27)

主によってパンが与えられる。これは救いです。主によって病が癒される。これも救いです。主によって仕事が上手く行く。これもまた救いです。主によっ

て人生が祝福される。これがわたしたちの求めている救いです。主は、主の業によって、これらのものをすべて、わたしたちに与えてくださるでしょう。

しかし、主はおっしゃるのです。それらは永遠の救いではない。それらは、やがて、朽ちてなくなってしまうものだからだ。わたしの心は、あなたがたが、朽ちることのない永遠の命を得ることだ。

いつまでもなくなることはない、永遠の命。あなたがたがそれを得ることが、主の心だ。この地上のパンは、食べればそれで終わりだ。しばらくすれば、また空腹になる。病気が奇跡的に癒されたとしても、またほかの病気になることがあるし、いずれ体は衰え、肉体は滅びてしまう。だから、あなたがたは、いつまでもなくなることはない、永遠の命を求めなさい。それが主の心だ。主イエスは、そのように、わたしたちに語りかけておられるのです。

永遠の命とは、何でしょう？ 主イエスは、言われました。「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである」（ヨハネ 6:40）

また、こうも言われました。「はっきり言うておく。信じる者は永遠の命を得ている。わたしは命のパンである」（ヨハネ 6:47-48）

わたしたちが主イエスを心の底から受け入れ、わたしたちが主イエスに自分のすべてをあずけ、わたしたちが主イエスにお従いして生きること。それこそが永遠の命だ。主イエスは、そうおっしゃっているのです。

わたしたちが心の底から主を受け入れ、主にすべてをあずけ、主にまったくお従いして行くこと。このことを、主イエスは、直喩、すなわち直接的なたとえでもって、表現されました。このような言葉です。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる」（ヨハネ 6:56-57）

主イエスを信じるとは、主イエスをわたしたちの心の真ん中にお迎えすることです。すると、主イエスは、わたしたちの心の中にお宿りくださいます。そうして、主イエスご自身が、内側からわたしたちを生かす生きた命となってくださる、というのです。新約聖書はこのことを「聖霊に満たされる」という表現でも言い表して来ました。

わたしたちの人生の日々の歩みが、目先のいろいろな必要によって振り回されるのではなくって。わたしたちの人生の日々の歩みが、目先のいろいろな出来事の変化によって一喜一憂するのではなくって。むしろ、内側から生かしてくださる主イエスキリストの生きた命によって生きる人生になるように。そして、主のみこころが天で行なわれているように、主のみこころが、わたしの思いと言葉と行ないを通しても行なわれるように。そのように生きることこそが、永遠の命であります。

しかし、多くの弟子たちは、主イエスにつまずきました。聖書にこう記されています。「弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「実にひどい話だ。だれがこんな話を聞いていられようか」このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった」(ヨハネ 6:60, 66)

ああ、イエスさま。残念ですけど、わたしが求めているのは、病気のいやしであって、自分の人生をあなたにささげることはありません。ああ、イエスさま。残念ですけど、わたしが求めていたのは、パンをお腹いっぱい食べることであって、自分の人生をあなたにささげることはありません。イエスさま。わたしが求めているのは、あなたがわたしのために何でもしてくさることです。このわたしが自分の十字架を取ってあなたに従って行くことなど、全然求めていません。イエスさま。あなたが病気をいやしてくださるなら、わたしはあなたのもとにいます。イエスさま。あなたがパンを与えてくださるなら、わたしはあなたのもとにいます。しかし、あなたがわたしのすべてを差し出すようお求めになるなら、話しは別です。あなたがわたしの心の真ん中の場所を要求されるのなら、話しは別です。イエスさま。はっきり申し上げますが、わたしはあなたを求めていたわけではありません。あなたが与えてくださるパンを、わたしは求めていただけです。

こうして、多くの弟子たちが、主イエスのもとを去って行った、と聖書は記しています。

わたしたちの信仰においても、この1万人の人々に起きたことが、起こり得るでしょうか？ わたしたちの信仰においても、多くの弟子たちに起きたことが、起こり得るでしょうか？ わたしたちは主の大いなる業を求めて、祈るでありましょう。主はわたしたちの祈りにこたえて、大いなる業を行なって下さるでありましょう。わたしたちは主の業を見て喜ぶでありましょう。そして、もっと主の業を見たいと願うのです。そうして思うのです。主イエスキリスト。このお方さえ共にいてくだされば、わたしのすべての願いがかなう、と。

しかしその時こそ、わたしたちは、自分の魂をかえりみて、自らに問わねばなりません。わたしは、主イエスご自身を求めていたのだろうか？ あるいは、主イエスがあたえてくださるパンを、求めていただけなのだろうか？

わたしたちは、どうしたら、自分の心の本当のありさまを、見極めることができるでしょうか。パウロの祈りが、その手がかりとなるかもしれません。パウロは、自分の肉体のとげが取り去られるよう、主に三度祈り求めました。しかし、とげは取り去られませんでした。代わりに、このような主の言葉が与えられました。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」(コリント二 12:9)

そこでパウロは、このような信仰告白をするに至るのです。「だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです」(コリント二 12:9-10)

どうかわたしたちが、主の業ではなく、主の心を求める者となりますように。どうかわたしたちが、主の与えてくださるパンではなく、主イエスキリストご自身を、生きた命として、自分の心の真ん中に置くことが出来ますように。ど

うかわたしたちが、目先の出来事や心配事に振り回されて生きるのではなく、むしろ、内側から生きた命となって生かしてくださる主イエスキリストに力づけられて、このように告白しつつ生きることができますように。すなわち、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇ろう。わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足している。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからだ。どうかこれが、わたしたちの信仰告白となりますように。

祈りましょう。

天の父なる神さま。あなたは、御子イエスキリストを通して、わたしたちの願い求めるものをすべて、与えてくださることを、感謝いたします。わたしたちは、御子イエスの御名によって、人生に必要な、あのことや、このことを、祈り求めます。そうして、あなたは、祈りに応えて、与えてくださるお方でいらっしゃいます。心から感謝いたします。

しかし今日、わたしたちは福音書の記事を通して、ひとつのことを学びました。それは、わたしたちが、主の心を求めないで、主の業をのみ求めるということがある、ということです。

わたしたちは、パンなくして生きることは出来ません。しかし、どうか、わたしたちの心の真ん中を占めるものが、主イエスキリストご自身であるようにしてください。わたしたちには、この世のなかで、多くの思い煩いや悩みや心配事があり、また、多くの祈り求めがあります。しかし、どうか、わたしたちの心の真ん中を占めるものが、主イエスキリストご自身であるようにしてください。

どうかわたしたちが、主イエスキリストによって全く心を満たされることの幸いを経験することが出来ますように。パウロのように、弱さ、侮辱、窮乏、迫害、行き詰まりの状態にあっても、なおキリストのために満足しているという、そのような超越的な境地を、わたしたちも経験することが出来ますように。それはまさに、永遠の命であり、けっして朽ちることのないもの、また、いつまでもなくならないものであります。そのような永遠の命を、わたしたちが今日、味わい知ることが出来ますように。どうかわたしたちを、お導きください。主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。